

日本女性会議 2025 橿原 研修報告書

研修名：日本女性会議 2025 橿原

日 程：2025 年 10 月 3 日（金） 12:30～17:30

会 場：奈良県橿原文化会館／奈良県社会福祉総合センター

参加者：田中詩織・藤本品・八木良人

会派：みらいと維新の風

【前半分科会 12:30～14:30】

分科会 3 生き方×働き方「なりたい自分」

講演／コーディネーター：小安 美和

パネリスト：須崎 康恵（奈良県立医科大学 女性研究者・医師支援センター准教授・副センター長／奈良県男女共同参画審議会 会長）

澄川 周平（奈良県警察本部 警務部警務課 企画室長）

岩城 はるみ（一般社団法人 COTOIKU 代表理事）

西岡 徳行（株式会社ハンナ取締役）

内容：前半は、株式会社 Will Lab 代表取締役 小安美和氏による講演「『女だから』『男だから』ではなく、生きやすい社会にするために」を聴講。

日本のジェンダーギャップ指数は 146 か国中 118 位と低く、特に経済・政治分野での遅れが大きいことが指摘された。背景には、性別役割分担意識やアンコンシャスバイアス、長時間労働などの構造的課題がある。女性が地方を離れる理由として「干渉から離れたい」という意識も示され、地域の価値観の影響が大きいとされた。一方、アイスランドでは男性育休 85%や役員クォータ制など、社会全体で公正を重視する仕組みが整っている。

提言として、①決めつけからの脱却、②自治体・業界団体による率先垂範、③地域特性を踏まえた連携の重要性が示された。

後半はパネリストそれぞれの取り組みについて発表&トークセッションにより、性別に関わらず、誰もが生きやすい社会の実現に向けて、声を上げ連帯し行動することの大切さを共有された。

所感：地方の価値観や人間関係が、若い世代の生き方を縛っているという指摘は共感できた。また、「男性の生きづらさ」も含めて社会全体で意識を変えていく必要があると感じた。行政自らがジェンダー平等を推進する姿勢は、草津市でも取り入れるべき取組である。「平等から公正へ」という言葉は、教育や子ども施策にも通じる理念として印象に残った。

分科会5 子どもの「自分らしさ」と「生きにくさ」をめぐって

司会：林 郷子（奈良大学 社会学部 心理学科 教授）

発表者：狗巻 修司（奈良女子大学 文学部 准教授）

飯田 順三（奈良県立医科大学 名誉教授／医療法人南風会 万葉クリニック
子どものこころ支援センター センター長）

奥山 志帆（郡山北小学校・郡山中学校 分教室「ASU」 主任）

内容：林郷子氏が進行を務め、発達障がいや不登校をめぐり支援の在り方をテーマに議論が行われた。

狗巻修司氏は、発達を「包まれ、ほどける」プロセスとして説明し、こどもの行動を急かさず「待つ支援」の大切さを強調した。飯田順三氏は、思春期における自尊感情の低下や不登校の背景に焦点をあて、「不登校は善悪ではなく現実的な選択」であり、家庭を安心できる場とすることが支援の出発点だと述べた。奥山志帆氏は、学びの多様な学校「ASU」での実践を紹介し、こどもたちの「心の居場所づくり」「豊かな体験活動」「進路保障」の3本柱による支援の重要性を語った。

全体を通して、こどもの「自分らしさ」を守るためには、焦らず寄り添い、環境側が柔軟に変わることが求められるとまとめられた。

所感：こどもの「生きにくさ」を本人の問題ではないこと。「不登校は善悪ではなく現実的な選択」「家は安心の場所がいい」という言葉が心に残りました。焦らず、待ち、寄り添う支援がこどもの力を育てるという考え方、「ASU」の実践に学ぶ心の居場所づくりは、草津市でも活かせる示唆が多くありました。

分科会4 笑って考える家族のカタチ

講師：瀬地山 角（東京大学大学院 教授・ジェンダー論）

内容：「笑って考える家族のカタチ」というテーマのもと、男性が家事を分担することの重要性が、ユーモアを交えて語られた。特に「男性が家事をすることは、女性が働き続けられる＝宝くじの当選金を確定させるようなもの」という経済的な視点が印象的であった。男性の家事時間が依然として短く、女性の就労を阻害している現状や、税制度・社会的慣習が女性の活躍を妨げている事例も示された。

所感：参加者の約9割は女性だったが、むしろ男性にこそ聞いてほしい内容と感じた。草津市としても、男性の家事・育児参画を後押しする施策（父親向け子育て講座、男性育児取得支援など）をさらに強化する必要性を感じた。

【後半分科会 15:30～17:30】

分科会9 子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないために

パネリスト：中谷 奈央子（性教育講師・思春期保健相談士）

吉川 ヒロ（tomoni.共同代表）

風味 良美（▼ネットなら）

内容：「子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないために」をテーマに、参画ネットなら、tomoni.思春期保健相談士らが登壇。デートDV防止や包括的性教育の推進など、地域での取組が紹介された。LGBTQ+の若者の約半数が自殺願望を抱くなど深刻な実態があり、無意識の差別「マイクロアグレッション」への理解が求められた。包括的性教育は、人権を基盤とし、体や生殖の仕組みだけでなく人間関係や多様性を含む教育であると説明された。また、学校任せにせず、地域・行政・家庭が連携し、誰もが安心して相談できる環境づくりが必要であるとされた。

所感：性教育を「生殖の知識」ではなく「人権と自己尊重の教育」として捉える重要性を再認識した。LGBTQ+や性の多様性への理解を深め、無意識の差別に気づくことが大人にも求められる。また、「アクティブ・バイスタンダー（傍観者ではなく介入者）」という考え方は、いじめや暴力防止にも通じる。子どもを守るためには、教育現場だけでなく、社会全体が一貫したメッセージを発信していくことが必要だと感じた。

分科会8 女性就業率最下位の奈良から考えるー日本国はじまりの地・橿原からはたらく女性が輝く未来へー

講師：塚田 まゆり（長野商工会議所 副会頭）

小安 美和（株式会社 Will Lab 代表取締役）

原田 杏子（五條メディカル株式会社 代表取締役社長）

森本 知加（株式会社南都銀行 営業店次長）

佐藤 雅大（佐藤薬品工業株式会社 代表取締役社長）

司会：上田 恭子（有限会社 STAR VOICE 代表取締役）

内容：塚田氏は「NAGANO 働く女性会議」の設立経緯と、地域全体を巻き込んだ女性活躍推進の取組を紹介した。50人の経営者と50人の働く女性の座談会からスタートしたこの会議は、行政や企業と連携し、政策提言や座談会を通して女性の声を社会に届けている。

パネリストからは各企業の実践的な取組みが共有された。南都銀行は育児や介護との両立支援、佐藤薬品工業は社内託児所の設置や男性育休の促進などを紹介。五條メディカルでは「健康増進幸福創造部」を立ち上げ、働きがいのある職場づくりを進めている。いずれの企業も「社員一人ひとりが安心して働ける環境づくり」を軸にしていた。

所感：印象的だったのは、フリートークの中で「女性社員の本音をどう引き出すか」という問いに対し、塚田氏は「ひとりひとり違う答えがあるから、ひとりひとりと話をしないといけない」と語った場面。最後に観客席にいた市長にもマイクを向け、「皆さんと共に、女性が輝く未来をつくりたい」と語られた言葉に、会場全体が温かい空気に包まれた。

女性の声を社会に届けることの大切さと、対話から始まる地域の変化の力を強く感じた分科会だった。

分科会 7 奈良で理工系女性人材を育てる

講師：安田恵子（奈良女子大学 特任教授）

久保博子（奈良女子大学 教授・工学部長）

顯谷智也子（奈良工業高等専門学校 准教授）

松岡由貴（奈良女子大学 准教授）

内容：日本では理工系分野における女性比率が依然として低く、OECD 諸国の中でも最下位レベルである現状が紹介された。奈良女子大学では 2022 年に日本の女子大で初めて工学部を設置し、女子中高生向けの「関西科学塾」や、奈良高専の「しなやかエンジニア教育プログラム」など、理系女性の裾野を広げる多様な取り組みが報告された。

所感：STEM 分野での女性活躍推進は、地域の人材育成や次世代のキャリア形成に大きな示唆を与える。草津市においても、中高生への理系進路支援、大学・企業との連携によるキャリア教育の強化が重要だと感じた。

まとめ・今後の活かし方

今回の日本女性会議では、家族のあり方やジェンダー平等、STEM 分野における女性活躍など、草津市の将来の政策形成に活かせる視点を得ることができた。特に、男性の家事参画や理系女子育成は、市の男女共同参画推進やキャリア教育施策の強化に直結する学びであった。